

令和7年度「熊本の学び」研究指定校事業 事業実績報告書

1 研究の内容

授業力向上 (○) ・道徳教育 () ・キャリア教育 () ・特別活動 ()
カリキュラム・マネジメント () ・その他 (○) (内容：小中連携)

2 学校の概要

<児童(又は生徒)数・教員数(令和7年(2025年)5月現在)>(単位：人)

プロジェクト地域(研究指定地域)	人吉市立第二中学校区			
プロジェクト校(研究指定校)	児童生徒数	教員数	校長名	研究主任等名
人吉市立第二中学校	393	27	中野 浩二	今村 恵里子・岡田 拓也
人吉市立人吉西小学校	226	21	小柿 勇	中山 理香子
人吉市立西瀬小学校	154	12	沢田 美穂	米多 朋美
人吉市立中原小学校	282	21	池田 雄一郎	梶原 貴志・内村 洋介

3 研究主題

「自ら問いを発し、学びを深め、未来を切り拓く子供の育成」

4 研究主題設定の理由

「熊本の学び推進プラン」には、「熊本の未来の創り手となる子供たちに期待する学び」として、「問いを発し、課題に主体的に立ち向かい、学びを深める熊本の子供」との提言がなされている。また、令和2年7月豪雨において、第二中学校区は甚大な被害を受けた。復興は着実に進んでいるものの、未だ途上にある。地域の希望であり、地域の未来を切り拓く存在である子供たちに、誰一人取り残すことなく学びを保障することは地域の切なる願いである。予測不可能で変化の激しい時代をたくましく生きていく資質・能力を身に付けるためには、主体的・協働的に学ぶ児童生徒の育成が必要である。そこで、授業力の向上を中心に、校区で連携した実践に取り組むこととし、本研究主題を設定した。

【授業の質の向上】

- ①単元を貫く学習課題や育成する資質・能力を明確にすることで、児童生徒が学びの見通しをもち、自ら問いを発するような授業改善が必要である。
- ②自分の言葉で考えを表現(発表したり、記述したり)できる児童生徒を育成する必要がある。
- ③主体的な学びとなるよう、児童生徒の「問い」を生み出す導入の工夫や、「まとめ」と「振り返り」の充実に向けた改善を進める必要がある。
- ④目指す児童生徒の姿や育成する資質・能力を共有した取組の充実が必要である。

【学習環境の改善】

- ⑤周囲の友達と関わったり、話し合ったり、協力したりするなどして、学びを深める取組が必要である。
- ⑥児童生徒の自己存在感を育む学習環境を整える必要がある。

【家庭連携の充実】

- ⑦家庭と連携し、学習習慣形成に向けた取組を充実させる必要がある。
- ⑧家庭学習の計画や取組の方法、読書への関心を高めるための取組を充実させる必要がある。

【校種間等交流の充実】

- ⑨ グランドデザイン・学校教育目標等の実現に向けて五者連携による取組をより一層充実させる必要がある。
- ⑩ スタートカリキュラムにおける幼児期の終わりまでに育みたい資質・能力及び期待する成長の姿を校区全職員で共有する必要がある。
- ⑪ 小・中及び小・小間での交流を踏まえ、互いの授業や取組について意見交換を行うとともに、小中相互の児童生徒理解の場を設定する機会を、より一層充実させる必要がある。

5 研究の具体的な取組内容の実際



図1 令和7年度二中校区 研究組織図

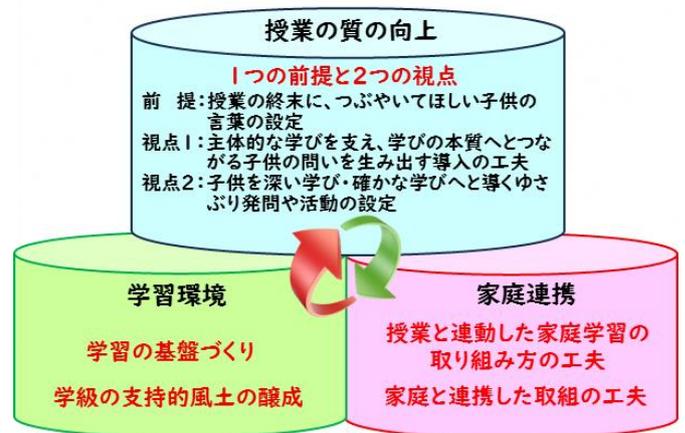


図2 研究の構想図（一部）

【授業の質の向上】

- 人吉一中校区での「熊本の学び」研究指定校事業（令和4・5年度）及び人吉市立教育研究所学力向上部会で提案している1つの前提と2つの視点を学習構想案に示し、授業づくりの骨格として反映させる。（前提：授業の終末に、つぶやいてほしい子供の言葉の設定 視点1：主体的な学びを支え、学びの本質へとつながる子供の問いを生み出す導入の工夫 視点2：子供を深い学び・確かな学びへと導くゆさぶり発問や活動の設定）（①・②・③）
- 根拠を明確にして発言する活動を、意図的に位置付ける。（②）
- 義務教育9年間で育みたい資質・能力や、中学校第3学年修了時の姿についての共通理解を図り、小学校低学年から義務教育修了後の姿を意識した指導を行う。（④）
- 学力調査等の結果を基に、各学校におけるつまずきを分析し、つまずきパターンの類型化と対策を検討する。さらに、4校で共通理解の場を設け、9年間を見据えた系統的な指導に生かす。（①・④）

【学習環境の改善】

- 学習に集中して取り組む基盤づくりとして、授業に臨む態度や準備の例を具体的に示し、学習に向かう態度が醸成されるように発言や教室でのマナー等について共通理解を図る。（⑤）
- 各教科等での学びの成果を校内・学級掲示することで、自己存在感や共感的人間関係の構築を図る。（⑥）

○学級の支持的風土の醸成に向け、学級経営等における充実した取組の好事例を小・中学校間で共有する場を設ける。(⑥)

【家庭連携の充実】

○「家庭学習の手引き」を活用し、発達段階に応じた家庭学習への取り組み方の理解を促す。特に、中学校1年生への接続時に、家庭学習の習慣化に向けた工夫を図る。(⑦)

○家庭学習の意義やその取組の方法等について、学校間や家庭との情報共有を積極的に図る。(⑧)

【校種間等交流の充実】

○各学校が目指す資質・能力を4校の家庭、教職員、児童生徒で共有し、行事や各教科等における活動時に具体的に示していく。さらに、スタートカリキュラムにおける期待する成長の姿を共有できるように、就学前保育施設等にもグランドデザインを示していく。(⑨・⑩)

○小・中、小・小間での交流を図るため、互いの授業を参観し合う機会を設ける。各学校の時間割を共有し、参観可能な日時を設定して、授業参観交流を行う。(⑪)

○小学校から中学校への円滑な接続のため、体験入学や説明会等の充実を図る。(⑫)

○人吉市立教育研究所学力向上部会と連携し、小・中学校各教科・各学年の学習構想案を蓄積し、市内全職員で共有することで、教職員一人一人の指導力向上を目指す。(⑬)

6 目指す成果【検証方法】

【授業の質の向上】

○各教科等の見方・考え方を意識した授業改善【研究授業及び授業改善チェックリスト、学習構想案による「1つの前提と2つの視点」、i-check 及び熊本県学力・学習状況調査等の年次比較】(①・②・③)

○発達段階に応じた地域共通の資質・能力が反映された、各学校における「授業改善チェックリスト」の作成・活用【授業改善チェックリスト】(④)

【学習環境の改善】

○主体的に授業に臨む態度の育成【i-check 及び熊本県学力・学習状況調査等の年次比較】(⑤)

○認め、ほめ、励まし、伸ばす学級経営を基盤とした支持的風土の醸成(⑥)

○子供の学ぶ意欲を高める校内掲示・学級掲示の工夫【自己存在感・共感的人間関係等を図る掲示等の工夫充実】(⑥)

【家庭連携の充実】

○授業で学んだことを家庭学習につなげる自主学習の工夫【発達段階に応じた「二中区家庭学習の手引き】(⑦)

○教職員・児童生徒・保護者・地域・行政の五者による、学校教育目標等の共有化【グランドデザインの五者共有】(⑧)

【校種間等交流の充実】

○就学前から中学校までの活動において育成する資質・能力の把握と共有【小学校3校のグランドデザインを幼保園等と共有】(⑨・⑩)

○小・中交流機会の充実による相互理解の深化【小・中交流会、体験授業等の工夫】(⑪)

7 研究実施の実際

時 期 (月)	実施内容
4 月	<ul style="list-style-type: none"> ○各学校の学校教育目標及び育成する資質・能力の決定 ○各学校のグランドデザイン決定 ○いきいき生活ウィーク（小・中） ○研究授業担当者等の選定 ○「熊本の学び」研究指定地域情報交換会 ○第1回研究推進委員会の開催
5 月	<ul style="list-style-type: none"> ○事業計画書提出 ○リーフレット原案作成 ○「熊本の学び」等に関する研修（各学校） ○第2回研究推進委員会の開催
6 月	<ul style="list-style-type: none"> ○案内チラシの作成 ○研究Webページ開設 ○各学校の校内研究授業及び授業研究会の実施及び参加交流 ○第3回研究推進委員会の開催
7 月	<ul style="list-style-type: none"> ○二中校区交流会の開催 ○実態調査の実施（児童生徒・教職員） ○各学校の校内研究授業及び授業研究会の実施及び参加交流 ○「熊本の学び」研究指定地域情報交換会 ○第4回研究推進委員会の開催
8 月	<ul style="list-style-type: none"> ○案内チラシの配付 ○実態調査の分析（児童生徒・教職員） ○第5回研究推進委員会の開催
9 月	<ul style="list-style-type: none"> ○各学校の校内研究授業及び授業研究会の実施及び参加交流 ○いきいき生活ウィーク（幼・保等、小・中） ○第6回研究推進委員会の開催
10 月	<ul style="list-style-type: none"> ○学習構想案、リーフレット完成 ○公開授業の実施（10/16） （中学校2本、小学校3校で5本実施） ○第7回研究推進委員会の開催
11 月	<ul style="list-style-type: none"> ○参加者アンケートの意見等集約、分析
12 月	<ul style="list-style-type: none"> ○第8回研究推進委員会の開催
1 月	<ul style="list-style-type: none"> ○いきいき生活ウィーク（小・中） ○本年度の校内研修のまとめ ○次年度グランドデザイン策定に向けた課題抽出 ○事業報告書提出

8 市町村教育委員会の取組の実際

- カリキュラム・マネジメントに基づく総合的な学校運営に関する指導・助言
- 研究推進における指導・助言
- 校内研修及び研究授業における指導主事等の派遣
- 講師招聘等における熊本県教育委員会との連絡調整
- 公開授業等の準備及び開催等における熊本県教育委員会との連絡調整

9 研究の成果【検証方法】

本研究における実態調査として、令和7年7月にアンケート調査を実施した。アンケート項目は、熊本県学力・学習状況調査の児童生徒質問紙の項目より一部抜粋したものを活用している。以下は令和5年熊本県学力・学習状況調査の児童生徒質問紙による結果との比較である。

質問項目		※小学校は校区の5・6年生対象		R5	R7
授業の質の向上					
【重点指標1】 授業では、課題の解決に向けて自分で考え、自分から取り組んでいたと思いますか。	小	80.7%	85.0%		
	中	71.1%	91.1%		
【重点指標2】 授業で、自分の考えを発表する機会では、自分の考えが上手く伝わるよう、資料や文章、話の組立てなどを工夫して発表していましたか。	小	65.8%	73.4%		
	中	58.0%	78.6%		
あなたは、授業や普段の生活の中で不思議だな、どうしてだろう、と思ったことを調べていますか。	小	45.0%	62.3%		
	中	50.0%	66.8%		
友達の意見を聞いて新しいことに気付いたり、自分の考えを深められたりして勉強が面白いなど思うことがありますか。	小	70.0%	80.3%		
	中	66.1%	86.1%		
学習環境の改善					
あなたは、学校生活の中で他の人が発言したり発表したりするときに、質問をしていますか。	小	31.0%	44.9%		
	中	22.4%	48.1%		
クラス全体やグループ、友達同士で話し合いをするとき、自分の意見を活発に発言していますか。	小	68.0%	69.8%		
	中	62.7%	74.8%		
クラスの話し合いで、みんなの意見が合わなかったとき、みんなが納得できる意見を考えて、提案していますか。	小	55.0%	61.8%		
	中	53.8%	66.2%		
家庭連携の充実					
家庭学習の取組状況					
小	量的な変化は見られなかったが、質的にはレベルアップしている。				
中	家庭学習を全くしない生徒が6%ほど減少し、1時間以上取り組む生徒が12%ほど増加した。				

【授業の質の向上】

- 学習構想案については、熊本県教育委員会の例示を基に、本研究の趣旨を盛り込み、実践につないだ。授業構想の段階で、「1つの前提と2つの視点（前提：授業の終末に、つぶやいてほしい子供の言葉の設定 視点1：主体的な学びを支援、学びの本質へとつながる子供の問いを生み出す導入の工夫 視点2：子供を深い学び・確かな学びへと導くゆさぶり発問や活動の設定）」につながる手立てを、学習構想案に具体的に示し、授業づくりに反映させることができた。その結果、校区小・中学校で目指す方向性を共通理解し、共通実践に向かう意識を高めることができた。（①・③）
- 「教師主導型」の授業観から脱却し、目の前の子供（学習者）の視点に立ち、学習者主体の単元デザインや授業デザインを行う必要があるという共通の理解のもと、実践を進めたことで、それらの意識の高まりが各校で見られるようになった。また、その成果として、熊本県学力・学習状況調査において児童生徒・教師ともに、「課題の解

決に向けて主体的に取り組むことができる。」という項目で向上が見られた。また、児童生徒については、「協働的な学習の場面で積極的に発言できる。」という項目においても高まりが見られた。(②・④)

- 研究授業後の授業研究会や、研究発表大会の分科会や全体会において、参加者が主体となる研究会を目指して、実施することができた。授業と研究会が相似形となることを目指したこの2年間の取組は、授業研究会に対する教員の捉え方を大きく変える契機となった。さらに、教材研究や児童生徒理解に関する教員間のコミュニケーションが日常化し、子供を主体とした学びにつながった。(①・②・③・④)

【学習環境の改善】

- 学級や学校の支持的風土を基盤に、主体的な学びを促す手立てとして、第二中では「ブックトーク」、人吉西小では「コミュニケーションタイム」、西瀬小では「さざなみタイム」、中原小では「R Jサークル」等に取り組んだ。それぞれに手立てを行うことで、自分の考えを伝えたり、相手の考えをしっかりと受け止めたりすることができるようになり、授業における全体協議やペア学習等が活性化してきた。また、二中校区交流会や研究会等で、各校で実践の工夫を共有する場を設けたことで、さらに目的に迫る各校の取組へと改善することができた。(⑤)
- 児童生徒の学ぶ意欲を高める校内掲示・学級掲示の工夫については、家庭連携部と連動し、家庭学習の工夫の掲示や児童生徒の頑張りに対する保護者からの励ましのコメントの掲示等を行うことで、児童生徒の主体的な学びへの意欲を高めることができた。今後もさらなる工夫を検討していきたい。(⑥)

【家庭連携の充実】

- いきいき生活ウィーク（家庭学習・メディア使用時間等の集計週間）を定期的に設定して家庭への啓発ができた。また、全学年の家庭学習への取組の様子を調査し、比較することで、家庭学習の質的・量的な充実の必要性が実態として浮かび上がるとともに、学校として系統的に育てたい力が明確になった。(⑦・⑧)
- 「二中校区学習の手引き」については、実態把握や協議が進み、「家庭学習の手引き（未来のための学び貯金）」を作成し、配付することができた。小・中間の接続を踏まえて内容を検討し、中学校版も作成して配付することができた。家庭における自主学習の重要性を認識し、継続的な取組を進めていきたい。(⑦・⑧)
- 家庭学習の手引きを児童・家庭と共有したことで授業の復習や予習を自学で取り組む児童生徒の姿が見られた。教師も授業中に声かけや意識付けを行い、継続的な取組を進めていきたい。(⑦・⑧)
- 共通化した研究主題のもと取組を進めることができた。教職員間での理念の共有は図れており、保護者への啓発を行っているが、十分に保護者と共有できていない実態がある。児童生徒が主体となった取組を進めるために、児童生徒や保護者の声を大切に研究推進となるよう、取組をさらに充実させる必要がある。(⑦・⑧)

【校種間等交流の充実】

- 就学前保育施設等にもグランドデザインを示し、スタートカリキュラムを共有することで、目指す子供像の共有が図られてきている。また、各学校が目指す資質・能力をそれぞれの学校の家庭・教職員・児童生徒で共有し、行事や各教科等における活動時に具体的に示したことで、小・中間の連携を深めることができた。(⑨・⑩)
- 小・中間や小・小連携等の各校の連携の充実を図るため、各校の授業を参観し合う機会を設定した。各校の研究授業の相互参観は、授業力向上を目指す本校区の研究の基盤となるものであり、研究理念の具体化や児童生徒理解の充実につながった。(⑪)

- 人吉市立教育研究所学力向上部会との連携により、小・中学校各教科各学年の学習構想案や実践事例を蓄積し、市内全職員で共有を図ったことで、人吉市全体にも本研究の視点を基にした授業構想を広めることができた。(⑩)
- 4校で研究を推進することは、学校数が多く困難を伴うが、中学校と小学校の文化の違いはもとより、各校の特色を理解し合いながら、組織づくりとともに研究を深め、4校で取り組む意義や価値を十分に見出すことができた。(⑩)

10 研究の課題と今後の展望

- 児童生徒質問紙の分析結果から、小・中学校ともに「家の人は、あなたが努力して頑張ったとき、ほめてくれますか。」や「話合いをしている時、友達の話最後まで聞いてから発言するようにしていますか。」の項目において数値が下がっていることが分かった。家庭学習の啓発と併せて、児童生徒の意欲の向上や頑張りを積極的に保護者に伝える工夫をしたり、適切な話合い活動の仕方の指導を行ったりしていく必要がある。
- 多くの研究授業の相互参観や二中校区合同研修会を実施することで交流が進み、顔の見える人間関係を基盤とした連携を深めることができた。今後は、組織の編成を見直すとともに、校内研修の時間を4校で調整し、オンライン等も活用しながら、より多くの教職員が研究推進に主体的に参加できる体制づくりの工夫をする必要がある。
- 「授業の質の向上」を主な研究対象とし、授業づくりについての本校区としての基本的な考え方を共有することができた。「1つの前提と2つの視点」は、本校区の研究の最重要項目であり、公開授業の参観者からは「子供の問いを生み出す導入の工夫」や「ゆさぶり発問」の考え方を参考にしたいなど、肯定的な意見が多く寄せられた。そのような中で、研究推進委員会では、改めて視点1と視点2の定義や考え方の見直しが必要との意見があり、原点に立ち返って研究を進めていく必要がある。
- 各校の研究主任が参加する人吉市立教育研究所学力向上部会においては、視点1と視点2のそれぞれについて、より詳細に理論を深めた研究に取り組んでいる。今後はその成果を踏まえ、二中校区研究推進組織が教育研究所と歩みを共にして実践を進めていく必要がある。
- 本研究において、4校が常に情報共有を行い、連携を密にしながら様々な取組を行ってきた。今後、職員集団が変わっても、無理なく研究内容を継続・発展させていくことができるよう、取組の内容を精選していくことについても検討が必要である。

11 研究成果の普及

- 研究の成果を学校ホームページ等で公開し、保護者や地域の方に本校区で取り組んでいることを周知する。
- 研究内容をまとめたリーフレット等を活用し、「熊本の学び」の理念に沿った教育活動の具体的な取組や成果等を積極的に発信していく。
- 人吉市立教育研究所学力向上部会と連携・協力することで、市内全教職員で本研究推進の成果を共有する。